

理学部は今

No.16 October 2006

理学部のホームページ <http://www.sc.niigata-u.ac.jp>

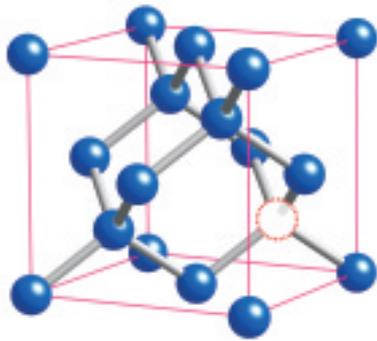


ヘリウム液化機（左上）、極低温超音波計測システムによる実験の様子（左下）、希釈冷凍機の心臓部（右）

Contents

- 研究
 - 特別推進研究
 - 「電荷揺らぎに由来する強相関量子相の研究」が発足…2
- 教育…3
- 平成18年度理学部後援会事業計画…3
- 平成17年度理学部後援会事業報告…3
- 学科ニュース
 - 数学科…4
 - 物理学科…4
 - 化学科…4
 - 生物学科…4
 - 地質科学科…5
 - 自然環境科学科…5
- 理学部校舎の改修…5
- 附属臨海実験所ニュース…6
- 退任教員紹介
 - 自然環境科学科 教授 石田昭男…6
- 新任教員紹介
 - 自然環境科学科 教授 西村浩一…6
- オープンキャンパス春・夏実施される…7
- 2006年度新潟大学理学部学部・学科体験…7
- 2006年度新潟大学理学部コロキウム…8
- これからの行事予定…8

特別推進研究「電荷揺らぎに由来する強相関量子相の研究」が発足



シリコン結晶の穴である原子空孔の模式図

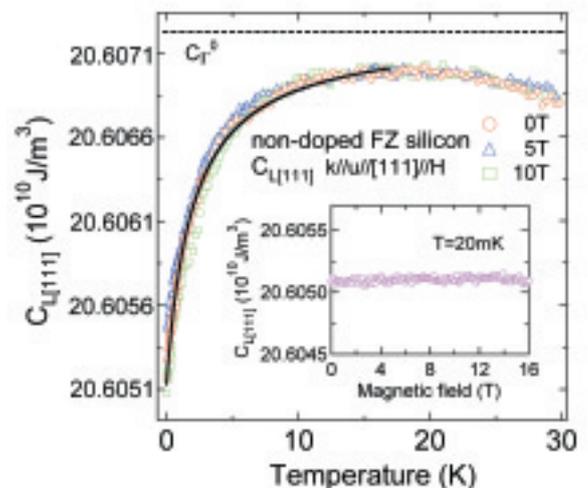
特別推進研究「電荷揺らぎに由来する強相関量子相の研究」(研究代表者:物理学科教授・後藤輝孝)が発足いたしました。これは、世界最高水準の基礎研究を推進するための文部科学省科学研究費補助金です。研究期間は平成18年度から22年度までの5年間であり、研究費総額は直接経費218,800千円(間接経費65,640千円)と大型規模です。詳しくは研究室のホームページ(<http://www.sc.niigata-u.ac.jp/goto/>)をご覧ください。

現代の高度情報化社会での必需品であるコンピュータや携帯電話、大容量高速メモリなどは、半導体中の“電荷”をもつ電子を制御する技術からできています。また、鉄を引きつける磁石やハードディスクドライブなどは、電子がもっている小さな磁石としての性質である“スピン”を利用しています。最近の物性研究では、互いに強く作用し合う(強相関)電子のスピンに由来する超伝導や磁性などの研究が重視されてきました。これに対して、本プロジェクトでは電子やイオンがもつ電荷に由来する強相関量子相の研究を推進します。具体的には3つの課題を設定しました。専門的になりますが、希土類プラセオジウム化合物の電気四極子をもつ非クラマース2重項を取り上げ、それが示す四極子近藤効果、四極子秩序を研究します。また、カゴ状化合物における電荷揺らぎをともなうイオンの振動に着目し、多チャンネル近藤効果、電荷揺らぎによる超伝導の研究を行います。さらに、半導体シリコン結晶中の孤立した原子空孔の電荷状態を研究します。本プロジェクトには、表紙写真にも示したような電気四極子を観測できる特徴的な超音波計測を駆使します。また、液体ヘリウムを用いて絶対零度に近い状態で実験する特殊な希釈冷凍機やヘリウム3冷凍機を利用します。設定した課題はどれも物性物理学の基本問題として重視されています。

なかでも半導体産業の米と呼ばれるシリコン結晶は、人類が手にした最も純粋で理想的な結晶です。私たちが、極低温超音波計測によりシリコン結晶中の原子空孔の直接観測に世界で最初に成功した意義はとて大きく、物理の理解だけではなく、急速な大容量化と高速化にともない超微細化が進行する半導体デバイスにおいて、その原料となるシリコンウェーハを評価する技術として注目が集まっています。

このような物質科学や生命科学における低温実験は、平成14年度概算要求で整備されたヘリウム液化機(表紙写真)および液化窒素供給システムがあっはじめて成り立つものです。これらは物質量子科学研究センターに設置されている低温室によって運営されており、新潟大学の基盤設備となっています。活動をまとめたセンターだよりも年に一度発行していますのでご覧ください。

(文責 後藤・根本研究グループ)



不純物ドーブのないシリコン単結晶の弾性定数の温度依存性。低温ほど発散的に軟らかくなっており、磁場をかけても変化しない。この現象はシリコン結晶中に孤立して存在する原子空孔の量子状態に起因しており、その濃度に比例する。横軸は絶対温度、縦軸は硬さの指標である弾性定数を表している。

教 育

理学部では1年生のために自然系共通専門基礎科目を開設しています。このたびこの授業用に、理学部の教員による、数学（微分積分学、線形数学、統計学：培風館）と化学（基礎化学：化学同人）の教科書（合計4冊）が発行されました。これらは今年4月の授業から使用されています。



平成18年度理学部後援会事業計画

1 定期総会の開催

平成18年4月5日(水) 午前11時から
自然科学研究科総合研究棟(物質・生産系)161号室

2 各種事業

- (1) 学生の課外活動及び福利厚生関係
 - ① 新聞の購読(新潟日報、朝日新聞、日本経済新聞、日刊スポーツ)
 - ② 大学祭援助
 - ③ 学生用設備充実のための援助
- (2) 学部教育事業関係
 - ① 特別講演会開催への援助
 - ② 学生研修、実験・実習への援助
 - ③ 国際交流事業関係への援助
 - ④ インターンシップ関係等への援助
- (3) 卒業祝賀会関係
卒業式当日に卒業祝賀会を開催
(参加者:卒業生、保護者、後援会役員、同窓会役員、教職員)
- (4) その他
広報活動として「理学部は今」を年2回発行

3 理事会の開催

平成19年3月28日(水) 予定

平成17年度理学部後援会事業報告

1 定期総会の開催

平成17年4月5日(火) 午前11時から
自然科学研究科総合研究棟(物質・生産系)161号室

2 各種事業

- (1) 学生の課外活動及び福利厚生関係
 - ① 新聞の購読(新潟日報、朝日新聞、日本経済新聞、日刊スポーツ)
 - ② 大学祭援助
 - ③ 学生用設備充実のための援助
- (2) 学部教育事業関係
 - ① 特別講演会開催への援助
 - ② 学生研修、実験・実習への援助
 - ③ 国際交流事業関係への援助
 - ④ インターンシップ関係等への援助
- (3) 卒業祝賀会関係
平成18年3月23日(木) 東映ホテルで開催
参加者 240名
卒業生 180名 保護者 8名
後援会 2名 同窓会 5名
教職員 45名
- (4) その他
広報活動として「理学部は今」を年2回発行

3 理事会の開催

平成18年3月29日(水) 午後5時30分から 理学部小会議室

学科ニュース

数学科

数学科では、入学直後、新入生を対象に大学での勉学や生活についてのガイダンスや親睦を兼ねて合宿研修を行っています。今年、平成18年4月8日(土)と9日(日)に県立青少年研修センター(新潟市越前浜)で実施しました。新入生36名教員6名が参加しました。8日は角田山登山は雨で中止となりましたが、教員による講義、懇親会、レクレーションなどを通して、交流を深め、大学生生活の一步を踏み出しました。

また、数学科では、年に2回(前期と後期)、理学部後援会の援助を頂いて、数学科講演会を行っています。前期は、数学科を卒業して教員になられた方を招いて、教職希望の学生に対してアドバイスをいただいています。今年、5月12日に数学科卒業生の野村智樹さん(新潟西高等学校教諭)と扇明子さん(巻総合高等学校教諭)に講演していただきました。野村さんには、教員になるための勉強法について、扇さんには、実際の教員生活について、お話をしていただきました。教職を目指す学生にとって、非常に参考になる講演でした。

理学部では、理学部の教員の研究交流を目的の一つとして、学科持ち回りで「理学部コロキウム」が開催されています。7月26日(水)の担当は数学科でした。今回は、斎藤吉助教授に「実数の世界からバナッハ空間の世界へ」というタイトルで研究内容の紹介、最近の研究結果などについて講演していただきました。

更に8月7日(月)に、学部・学科体験が行われ、模擬講義は数学科が担当で、田中環教授が「画像情報とデジタル化とその仕組み」というタイトルで講義されました。パソコンやテレビの画像において使われている数学に関する興味深い講義でした。また、8月8日(火)に、オープンキャンパスが行われ、数学科の企画には、90人ほどの高校生が参加しました。これらの行事を通して、多くの高校生が数学に親しみをもってくれることを願っています。

化学科

今年、梅雨明けが遅かったものの、8月に入り晴天が続き、この時期の恒例行事である「オープンキャンパス」が暑い中、行われました。化学科には約120名もの高校生が見学を訪れ、これは前年度の約2倍、理学部6学科のなかで最大人数となり、この人数が収容できる会場確保に多少苦労した年でした。化学科の説明は大学院自然科学研究科・物質生産棟1階・161室で行い、机をすべて撤去、椅子のみの会場を設営することで、何とか120名全員に座っていただくことができました。

ここ数年、化学科の「オープンキャンパス」では、高校生を各研究室に案内し、大学で行われている研究内容などについて説明・解説を行っていましたが、参加者が増えるに従い、参加者全員に対して満足できる時間・密度で実施することが難しくなってきました。そこで今年度化学科では、研究室案内とポスター展示を組み合わせることを計画しましたが、この前年度からの計画変更が幸いし、前年比約2倍という大人数を受け入れることができました。

非常に暑い中ではありましたが、多くの教員・修士学生の御協力のもと研究室案内・ポスター解説を行い、多くの高校生が、研究内容や機器に関する説明、実験の実演に興味深く見学していきま



物理学科

今年で4回目となるケルビン祭(物理学科祭)が6月9日に開催されました。前半の目玉は大学院生による研究室紹介で、お祭りの最後は、1年生から大学院生までの学生と教員が一同に会する大バーベキューパーティーで締めくくられます。研究室紹介では、学部学生の投票によりベストプレゼンテーション賞が決定されるので、各研究室で趣向を凝らした発表が競い合われます。今年、物性理論研究室が1位の栄誉に浴しました。パーティーは、低気圧が接近していたにもかかわらず担当係りの熱意が届いて屋外開催することができ、総勢約210名が参加するこれまでで最大規模のものとなりました。学年間の壁や学生教員間の敷居を越えて物理学科の一体感を培うことができたようです。

8月7日に学部・学科体験、続く8日にオープンキャンパスと、高校生向けの行事がありました。「原子・原子核からクオークへ」、「低温の世界-液体を使っているんなものを冷やしてみよう」という2つの出し物で物理学の魅力をアピールしました。高校生向けの理科振興活動として、今年、県内各高校と連携してのSPP(サイエンスパートナーシッププログラム)やSSH(スーパーサイエンスハイスクール)に物理学科総出で取り組みます。8月5、26日に行ったSPPでは、「放射線の性質とその利用」「宇宙物理学」「アルミニウム金属中の原子の配列を調べる」「太陽エネルギーを物理学で考える」の4講座に31名の高校生を迎えました。さらに5講座が予定されています。



生物学科

生物学科は今年度22名の新入生を迎え、4月21日(金)午後6時すぎから生協第一食堂にて、新入生との懇談会を行いました。この企画は、当学科では1年生1学期の学科専門科目の授業が「生命科学への招待」ひとつしかないため、入学後早い時期に学生と教員が懇親を深める機会として、特に新入生が各自のアドバイザー教員に気楽に相談できるようになる雰囲気を作る目的で昨年から始めたもので、今回で2回目になります。今年度は、各研究室所属の4年生・大学院生に加え、2、3年生にも呼びかけて希望者に参加してもらい、新入生22名、3年次編入・転科生各1名、在校生約30名、教員12名、合計約60名の盛会でした。学科教員の自己紹介では、「私が1年生だった時」というお題でそれぞれひとことお願いしました。新入生による自己紹介では、ガイダンスの時とは緊張していたためか、おとなしい人ばかりという印象を持ちましたが、2週間ほど経って少しは大学生生活に慣れたらしく、それぞれの個性が現れていたと思います。最後には恒例(?)の渡辺先生と2年生の北名君によるキーボード演奏があり、ノンアルコールにも関わらず盛り上がった楽しい2時間でした。



地質科学科

昨年JABEE(日本技術者教育認定機構)に地質エンジニアリングコースのプログラムを申請しましたが、このほど正式に認定されました。このコースを修了すると技術士補の資格が得られます。このたびの申請に関わる一連の取り組みのなかで、カリキュラム全体や個々の授業科目について改めて議論され、教育改善に役立ったと思われま

す。理学部A棟東半分の改修工事が今年9月から来年3月までの予定で始まります。これまで永い間使用してきた「地質第1講義室」がなくなります。痛みかけた椅子、黒板ともこれでお別れです。来年春には新しい校舎が完成しますが、地質科学科の「標本展示室」がA棟1階の理学部正面玄関を入ってすぐの所にできる予定です。

新潟大学超域研究機構プロジェクト「日本地球掘削科学の拠点形成:海洋底地球科学分野の強化と新領域の創成」(平成18~20年度)が採択されました。最新の分析機器が購入されて岩石鉱物試料の局所非破壊精密分析が可能となり、新たな成果が得られることが期待されます。

旭町学術資料展示館と地質科学科が主催する企画展「新潟県の化石—化石から日本列島の歴史を考える—」が9月5日~11月30日(火・木・土曜日)の10~18時の期間、旭町学術資料展示館でオープンします。法人化後は一般市民向けの普及活動もさかんに行われるようになってきました。

自然環境科学科

今年度、自然環境科学科では、三年次編入生1名を含む計37名の新しい仲間を迎えました。ガイダンスの時は皆緊張した面持ちでしたが、歓迎会の時はうち解けた様子だったのが印象的でした。新入生は第1期にスタディースキルズを履修しますが、この科目を通じて高校とは違う学習方法を学び、そして自ら調べたことをまとめて発表する力がついたことと思います。

6月には、防災科学技術研究所より西村浩一先生をお迎えしました。先生のご専門は雪氷学、気象学で、雪崩の内部構造と流動機構の解明、吹雪の構造解明と数値モデルの開発、積雪の変質と雪崩発生予測などを中心に研究されています。

8月には理学部体験入学とオープンキャンパスが開催されました。体験入学には20名ほど、オープンキャンパスには60名ほどの参加者がありました。オープンキャンパスの際に行われたパネル展示のコーナーでは、学生が主体となって雲のできる様子のデモ実験を行っていましたが、多くの高校生が不思議そうに、また興味深そうに見入っていました。その隣室では、教員による学生生活・学務・入試・就職の説明会や、院生・学生とのフリートークが行われていましたが、クーラーも無い中、皆熱心に話に聞き入っていました。本学科に対し一人でも多くの高校生が興味を持ってくれることを期待しましょう。

理学部体験入学の前日には、「信濃川24時間水質一斉調査」が行われ、多くの学生、院生が参加しました。昨年は行われなかったのですが、今年は学生たちが自主的にこの調査復活させました。上流から下流にかけての9地点で2時間おきに水を採取し、メンブランフィルターによるろ過のあと、パケットテストによる簡易濃度測定、pH、水温測定が行われました。非常に目の細かいフィルターを使用したため、ろ過には皆相当苦勞したようです。持ち帰った水は、今後、原子吸光装置により主成分分析が行われます。今後も調査を継続する予定です。

理学部校舎の改修

概算要求を行なっていましたA棟東側部分の改修工事は、耐震補強のための外装工事のみ予算化されました。また、日本中いたるところで問題を引き起こしているアスベスト建材が、新潟大学の多くの建物にも使用されていることが判明し、急遽その除去工事をするようになりました。理学部校舎のいくつかの部屋もその除去工事の対象となっています。これら2つの工事を実施する際に、A棟東側部分の内装の改修工事も併せて行なう計画が進んでいます。もとより、経費が潤沢ではありませんので、今回の改修工事は、極力経費を切りつめ、また学内のいろいろな経費を活用して実施することになります。工事期間中、代替となる部屋を提供することもできませんので、しばらくの間ご不便をおかけします。また、本号が皆さんの手もとに届く頃には、工事が開始され、騒音、粉じんの発生などご迷惑をおかけすることになりますが、ご協力をお願いいたします。

昨年度に引き続き、学内経費を用いたC棟東側部分の改修工事も計画されています。予算との関係で、工事範囲がどこまで及ぶのかは不明ですが一歩ずつでも前進することは喜ばしいことです。

講義室、ゼミ室を集中させ、学生用玄関、ロビーなど、学生のための学習環境、生活環境の整備を盛り込んでいるB棟の改修計画が進展していないことを心苦しく思っています。理学部校舎の改修工事が一日も早く完了することを願うばかりです。

(建物委員会委員長 檀上篤徳)

附属臨海実験所ニュース

附属臨海実験所では、毎春、全学部 of 学生を対象とした公開臨海実習を開催しています。本年は、埼玉大学理学部の井上金治先生を協力教員としてお招きし、3月6日から4泊5日の日程で開催しました。理学部からは11名(生物学科5名、自然環境科学科4名、地質科学科2名)、農学部から4名、医学部から1名、総勢16名の学生が参加し、海産無脊椎動物の観察、パフウニの発生実験や海藻標本の作製など、様々な実習項目に熱心に取り組み、海洋生物の多様性に理解を深めました。また、実習4日目には、各人が自主的に取り組んだ課題を発表する研究発表会も行われ、受講者は緊張しながらも自らの研究内容を発表し、活発な議論を交わしていました。早春の佐渡の美しい青空のもと、様々な学部 to 所属する学生が寝食を共にし、充実した時間を過ごしたとともに、大変思い出に残る5日間であったと思います。なお、来年3月上旬にも全学部対象の公開臨海実習を開催しますので(2007年1月中旬に各学部の学務係を通じて案内を掲示予定)、理学部学生の皆さんも学内の友人を誘って、是非、本実習に参加してください。



実験所周辺の磯における海洋生物の観察風景



海藻標本の作製風景

退任教員紹介



思い出すこと

本年3月31日付で定年退職しました。30年間勤務することができ、その間に会った多くの同僚や学生に感謝しています。4月1日からは、新潟大学特任研究員という資格を得て、研究を継続しています。

退職前の数年間、特に気になってきたことは、大学教育はあまりにも筆記試験に偏重していないかということでした。確かに課題研究は他の授業科目と性質を異にしますが、圧倒的多くは筆記試験で理解度を判定しています。筆記試験を補うものとして、私の担当する基礎科目については口頭試問を実施してきました。「理解したことを口頭で説明する」ということは学生にとって決して楽なことではありません。質問に答える事はなお一層です。口頭試問を受けた多くの学生が「自分の理解度が不十分であったことを知らされた」と話していました。時

自然環境科学科 教授 石田昭男

間のかかることですが、理解をより確かなものにする有効な方法であると確信しています。口頭試問のより一層の導入を希望しています。

最近、日本の占領政策に大きな影響を与えたと言われる「菊と刀—日本文化の型 ルースベネディクト著 長谷川松治訳 講談社学術文庫」を読む機会を得ました。我々の立っている文化的基盤を認識する格好の書であります。私は第1章と第11章に感銘しました。

新しいエネルギー源を目指す核融合プラズマが私の研究対象です。このプラズマとの出会いと私の精神的骨格をなす禅と茶の湯との出会いは、高校卒業後の1年足らずの間にありました。今その出会いの大切さをしみじみと感じています。学生諸君も自分で自分を信じ、今という時間を大切にしたいと願っています。

新任教員紹介



特色ある研究と教育を

本年6月2日に自然環境科学科の教授として着任いたしました。北海道大学理学部地球物理学科を卒業後、(財)日本気象協会、北海道大学低温科学研究所、(独)防災科学技術研究所において、主に環境アセスメント、大気境界層内の気象と雪崩・吹雪のメカニズムの解明に向けた研究を行ってまいりました。稚内の雪原から、黒部峡谷、ヒマラヤ、アルプス、南極に至るフィールド観測、大小各種スケールの実験、モデルの構築等を試みて参りましたが、未だにそれらの自然現象の本質を明らかにする段階には至っておりません。

ところで、我々の暮らす日本は国土の60%が「雪国」

自然環境科学科 教授 西村浩一

で、ここに全人口の20%が住み、経済規模では国内総生産の約18%を占めることをご存知でしょうか。そしてこの寒冷地域では、今後温暖化が顕著になり、それが地球のエネルギー収支、水・物質循環、植生変動、つまり我々の身近な生活から地球惑星全体に至るまで、その将来に大きな影響を与えると考えられています。今後の地球環境の変動を論じる上で重要な鍵となる日本の寒冷地域、その中央に位置する大学の一員として、特徴ある自然科学の研究を進めると共に次世代を担う人材の育成に努めていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

オープンキャンパス 春・夏実施される

今まで、オープンキャンパスは年に1度、8月に行っていました。しかし、もっと早い時期にも行った方がよいという大学内外の意見があり、3月18日(土)に理学部独自の春のオープンキャンパスを実施しました。理学部独自開催ということで、高校生が来てくれるか心配でしたが、2月はじめからの広報活動の結果、高校生、引率教諭、保護者合わせて160名以上の参加がありました。当日は、全体説明会(13:00~13:30)として、学部長挨拶の後、谷本教授による「理学の楽しみ」と題する全体講演がありました。その後、各学科に分かれての学科別説明会(13:40~16:00)が行われました。また平行して引率の先生方との懇談会も実施されました。当初の予想よりも多い参加があり、またアンケート結果も好評のものとなり、成功裏に終わりました。

夏のオープンキャンパスは8月8日(火)に行われました。春のオープンキャンパスに続くものでしたが、春・夏2回連続して参加しても有意義なものとなる企画で実施しました。今年は、高校生、引率教諭、保護者合わせて470名以上と、昨年よりも50名ほど多い参加申し込みがありました。全体説明会(12:30~13:00)は総合教育研究棟E260室を会場に、理学部の入試や学生生活についての説明が行われました。大教室ですが470名以上の参加があり、補助の椅子を用意するほど活気あふれた全体説明会になりました。その後、生徒たちは、各学科に分かれて、学科別説明会に参加し、模擬授業、研究室案内、展示の見学などを行いました。また、進路指導の先生方は理学部教員との懇談会に参加し、高校側からの意見や要望、理学部からの説明などの意見・情報交換、討論が行われました。終了後回収されたアンケート結果は生徒、引率教諭ともに好評なものが多く、成功裏に終了しました。

(広報委員会委員長 竹内照雄)



(夏季オープンキャンパスの様子)

2006年度 新潟大学理学部 学部・学科体験

今年度から学部学科体験はオープンキャンパスと切り離して開催されることになり、8月7日は学部学科体験、翌日はオープンキャンパスとして開催されました。今年の理学部の学部学科体験への参加者は113人で、昨年より若干減少しています。

学部学科体験は理学部B棟の合同講義室で学部長の挨拶からはじまり、それに引き続きDVDビデオでの学生生活紹介がありました。このビデオは学生生活の日常がよくわかるもので、学生生活の一端がリアルに描写されています。

11時からは、数学科の田中環教授の模擬講義が行われました。理学部の専門科目「デジタル表現論」の内容から「画像情報のデジタル化とその仕組み」というテーマで講義が行われ、数学が現代IT技術の基礎を支えるものであることがわかる講義内容でした。

午後から理学部の自由見学で、参加者は各学科をまわりました。各学科の趣向をこらした展示、実験演示、ミニ講義等で、参加者の高校生は理学部を十分堪能したようです。

オープンキャンパスと学部学科体験を切り離したはじめての試みで、どのような効果があったか分析し、次年度からの、学部学科体験のあらたなありかたを探っていく必要があります。猛暑の中、準備された各学科の方々のご尽力に感謝いたします。

(入学試験委員会委員長 谷本盛光)



2006年度新潟大学理学部コロキウム

理学部コロキウムは今年度に入って19回目をむかえ定着してきました。このコロキウムは教員の間で互いの研究を理解しようという動機から出発しましたが、最近では学部学生や大学院生の参加が多くなっています。毎回、月末の水曜日の午後16時30分から1時間程度の講演をうけ、その後質問にはいります。自然科学系の他学部の教員にも案内することになっているため、時折、他学部の参加者もいます。多様な専門家の議論は時として思いもかけない議論になります。

今年も6回を予定しています。5月、6月、7月の前半と10月、11月、12月の後半です。今年のこれまでのコロキウムでは、各学科のいま旬の研究が紹介されています。

第19回 理学部コロキウム 5月31日

「放散虫から太古の海を探る」松岡篤 教授(地質科学科)

第20回 理学部コロキウム 6月28日

「発生・分化における核膜機能の分子遺伝学的研究」古川和広 助教授(化学科)

第21回 理学部コロキウム 7月26日

「実数の世界からバナッハ空間の世界へ」齋藤吉助 教授(数学科)

10月の理学部コロキウムは、新聞紙上でも話題の後藤研究グループの中心的存在、根本助教授の登場です。超音波を使ったユニークな研究が紹介される予定です。

(研究WG委員会委員長 谷本盛光)

平成17年度卒業生進路状況および平成18年度入学者数

入学者数		学科等	卒業生進路 (平成18年3月卒業)					
新入学	3年次編入学		進学	教員	公務員	民間企業	その他	計
*36	2	数 学 科	16	7	1	8	8	40
*54	2	物 理 学 科	30	5	2	9	5	51
36	5	化 学 科	20			7	5	32
22	1	生 物 学 科	12	1		5	0	18
26	2	地 質 学 科	19		1	5	2	27
36	1	自然環境科学科	14	2	1	11	3	31
210	13	計	111	15	5	45	23	199

※留学生を含む

これからの 行事予定

(平成18年度後半)

10月2日	: 第2学期授業開始	1月20日~1月21日	: 大学入試センター試験
10月30日~11月5日	: 新潟大学WEEK	2月25日~2月26日	: 前期日程入学試験
11月3日~11月5日	: 大学祭	3月11日~	: 春期休業
11月18日~11月19日	: 推薦入試	3月12日	: 後期日程入学試験
12月24日~1月6日	: 冬期休業	3月22日	: 卒業式・卒業祝賀会

新潟大学WEEK 理学部企画

11/3(金) 13時~15時	みてさわって!アインシュタインと物理学最前線 ~物理学科の設備を使う楽しい実験とやさしい科学解説~
11/3(金)~11/5(日) 10時~17時	新潟県と世界の化石 ~化石実物およびパネル展示~
11/4(土) 13時~	化石について ~講演~

理学部ホームページの
高校生・受験生向けサイトが新しくなりました。

<http://www.sc.niigata-u.ac.jp>